Dear地球民

第１２号
1994年５月発行

編集発行ゆがわら国際交流協会
〒259-03　神奈川県足柄下郡湯河原町土肥1-7-1
湯河原町商工会内　☎0465-63-0111

国際理解講座『外国に恋して』～海外留学体験談～

タレント・キャスター　宮野比呂美さんをお招きして

去る平成５年11月25日(木)午後7時30分より、町役場会議室において、湯河原町と共催して国際理解講座を開催した。今回は、ＴＶタレントでニュースキャスターの宮野比呂美さんを講師に招き、『外国に恋して』のタイトルで講演を行い、会員はじめ一般の町民40名が聴講した。

まず、美人の講師に聴講者の間からどよめきが起こった。講師の宮野さんは、仕事柄、話すことには慣れているはずなのに、なぜか初めは硬さが感じられた。多分、聴講者たちの感情を意識したのかも知れない。しかし話が進むにつれて口も滑らかになり、予定の時間を大幅にオーバーするほどであった。

〝外国で上手にやるにはコミュニケーションの仕方の違いを認識することも大切〟
熱弁中の宮野さん

フィギュアスケートでインターハイ出場経験も持つ宮野さんは、昭和58年「スター誕生」でグランプリを獲得してデビュー、その後、タレントとして活躍していたが、英語の勉強をしたいと思い立ち、アメリカに半年の予定で留学した。やがて短大へ、そしてボストン大学経営学部に編入、平成４年５月に卒業と、彼女の欲望は、初期の目標を大きく上回り、それを次々にクリアしていった。しかしそれは平坦な道ではなかった。何度か繰り返す挫折、それに立ち向かう闘争心の凄まじさ、アメリカという大きな空間の中で、一人の若い日本人女性が堂々と自己主張をしなければ生きて行けない生きざまを、写真や図表のスライドを交えながら彼女は自信の体験を語って行った。外国での交友関係や師弟関係、そして大学のカリキュラムや単位取得のシステムなど、わたしたちには新しい知識として大いに参考になった。

帰国後の彼女は、現在キャスターとして充電中とのことだが、ゴルフ場建設のプロジェクトに参加したり、また、ある会社設立のスタッフの一員として活発に活躍している。まだ28歳の一女性が社会で堂々と渡り合えるほどに成長したことは、たった一人で数年間をアメリカで生き抜いてきた経験が人間を大きく変えたと言って過言ではないようである。アメリカは危険だと私たち日本人は思いがちだが、危険を回避する生き方はいくらでもあり、外国での生活がその人間を大きく成長させることは間違いないようである。ただし、その人の意識次第だが...　　（伊藤　公洋）

楽しい集い

恒例のクリスマスパーティーが12月22日スタジオ千夢にて開催され、60人が集いました。今回のテーマは"タイ"です。タイを愛して止まない石水裕ご夫妻(吉浜在住)はじめ、スタッフ手作りの、甘く辛く酸っぱいタイ料理が並びました。トムヤムクン(エビのスープ)、ゲーンキョワーン(緑色のミニ唐辛子のカレー)、ヤムウンセン(春雨サラダ)、ソムタム(魚の醤油ベースのニンジンの辛い料理)、ナタデココのデザート。一度試したタイ料理は、やみつきになりそう。今回のパーティーには、会員や家族、やっさ国際交流のホストファミリー、語学講座の生徒さんに加え、ちょうど来日中だったブラジルのマリアナさん(昨年夏、吉浜の浜野さんのお宅にホームステイしたマサミ・ウエダJr.君の妹)、シンガポールのクリスティーヌ・アンさん(英会話の南スージー先生の妹)にも参加いただき、よりにぎやかなものとなりました。

また、皆さまにお持ち寄りいただいた品物による、チャリティーオークションの売上金¥65,600は、全額を曹洞宗タイ国障害児財団に寄付致しました。ご協力に深謝申し上げます。

おじゃましま～す

教室拝見!

サッカーのＪリーグ人気などからも窺えるように、ブラジルがブームになっているそうです。ゆがわら国際交流協会では、簡単なあいさつ程度の会話ができるようにと、ポルトガル語講座を開催しました。城堀会館で行われたこのポルトガル語講座、隣の部屋で開催された中国語講座に比べ人数的には半分ですが、我がポルトガル語講座'93後期のメンバーを紹介します。

★　リスボンへ留学していたときは、"キミキーナ"とか"キミニャン"と呼ばれていたそうで、その言葉の響きのとうりのＨプロフェッソーラ(先生)。お子さんを湯河原のお兄さんの所に預け、国府津から来てくれました。『ムイト オブリガード(ありがとう)』であります。

♥　「Hungry?」というカップヌードルのコマーシャルがテレビから流れてくると、家のどこにいても走って来て見てしまうというＮさん。フランス生まれ。ポルトガルに関した新聞などをスクラップしており、好奇心が服を着て歩いているようです。

♣　ブラジル人に千個の部品の製作を依頼したら、千個のセンという発音はポルトガル語で百を表しており、百個しか作られなかった話など、ブラジル人と一緒に仕事をしている中からの興味深い話をしてくれるＮ②さんは、自動車部品メーカーに勤めています。

◆　最近湯河原に越してきたＳさん。イタリア人シスターの多い、九州のカトリック系の学校で、西洋文化の雰囲気の中で育ったそうです。ポルトガル語、スウェーデン刺繍、英語講座etc.「ぼけ防止」と言いながら色々なことに興味は尽きないようです。

♪　"市場"という意味のお店を経営しているＴさん。学生時代はスペイン語を勉強していたが、どういう訳かボサノバが好きでよく聞いたそうです。授業を途中で脱線させる名人で、さりげなく雑談に持ち込むテクニックは抜群です。このクラスの番長でもあります。

●　「バモス ベベール セルヴェージャ(ビールを飲もう)しません？」覚えたばかりのポルトガル語を使い、駐車場に行くまでの間に皆をお酒に誘うＩさんは、吉浜の植木屋さんです。

♠　沢木耕太郎の「深夜特急」を読んでポルトガルに興味を持ったそうで、どう見てもゼネコンからお金をもらえそうにないＩ②さんは公務員です。一年間の講座で、ウン ドイス トレース(1,2,3)の歌はどうやら覚えたそうです。

☆　最後はこの人。都合で欠席した人のために、毎回ノートをコピーしてきてくれ、クラス全員から級長として崇められているＹさん。いつも優しく微笑みかけてくれるイタリア大好き人間。Dear地球民の編集発行も一手に引き受けています。

ときにはブラジルの清涼飲料を試飲しながら、また、情報交換の場として、和気あいあいの楽しいポルトガル語講座でした。　　（Ｔ．Ｉ．記）

授業の合間にホッと一息
前期講座の面々。前列右が本多公子先生。
隣の竹林君は当時中三。８月に以前ホームステイした学生を訪ねブラジルを旅行。

『青春という名の詩』

私は今回のテーマを『青春という名の詩』の紹介にしたい。
誰もが当然のごとく若き日に胸に抱く疑問があった筈だ。それは、いま、自分たちは、どういう時代に生きているのだろう。
自分の生き方をどういう方向に針路をとって進めばよいのだろう。

それには年齢差がある。いま若さを謳歌している人、遠い昔に青春を過ごした人、それぞれの時代に直面して、自分の時代は不幸だった、あるいは良き時代だったという人。
しかし、何時の時代にせよ、その人なりの青春というものが、あっただろう。

私は世界大戦の真っただ中で青春をすごした。しかし、私には不幸だったという感じはあまりない。むしろ抑圧された世の中から解放され、これがほんとうの自由なんだという実感を持っただけでも幸せだった。

私の紹介したい詩は、それらの不安や迷いを超越し、自分を励ます心の詩である。
古いアメリカの幻の詩人サムエル・ウルマンのもの。
それは宗教や思想をも越えて、ロマンを謳いあげた心の詩である。

世界大戦の最初の日本軍の勢いに破れ、アイ・シャル・リターンと無念の思いをアメリカの国に誓って、その約束を守り、1945年9 月30日に厚木にコーン・パイプを口にくわえ、飛行機から降りたったマッカーサー元帥の机の上には、いつもこの詩を額縁にいれて飾ってあったという有名な話しが残っている。
いまここに全文を紹介したいが、長い詩なので、あたかもバイブルの全文を紹介できないように、そのさわりというか、私のもっとも気に入っている部分をまずご紹介したい。

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ちかたを言う。
・・・・年を重ねただけで人は老いない。
理想を失うとき初めて老いる。・・・・・

前関西経済連合会長の宇野収さんと作山宗久さん共著の翻訳本が出版されているが、原文よりも翻訳の方がより詩作としては素晴らしいと褒めていた。
ところが翻訳者が誰かはっきりしていないとも言われており、まさに幻の詩らしく、余計に人の心を打つのではないだろうか。

日本の多くの著名経営者のファンが多いと聞いている。作山氏もある会社の役員をされており、アメリカへの出張の際、わざわざサムエル・ウルマンの生れ故郷のアラバマ州のバーミンガムの公立図書館まで行き、受付けの人にウルマンのことを問い合わせたところ、その人は知らないと答えたそうだ。それほど古い話しなのだ。
特に心を打たれるのは、宇野さん、作山さんのように、老いてもなお、ロマンの溢れるれる詩を愛し続ける人となりに感銘を覚えるのである。　石　井　宏　樹